

## 啓蒙の動物寓話における擬人化（2）

— G. E. レッシングの『寓話』と翻訳による S. リチャードソン作  
『イソップ寓話』との比較考察

小林 英起子

【キーワード】 レッシング、サムユエル・リチャードソン、イソップ、動物寓話、啓蒙主義

### 序

古代ギリシャのイソップ寓話は、時を越えてさまざまな国で受容され、寓話はさらに啓蒙主義の時代、ドイツでも人気のある文学のジャンルであった。英国のサムユエル・リチャードソン（1689-1761）は、中産階級に向けた書簡体小説 *Pamela, Clarrissa* をきっかけに英国近代小説のジャンルを発展させた作家である。彼が1740年に著した *Aesop's Fables with instructive Morals and Reflections, abstracted from all Party Considerations, adapted to All Capacities; And design'd to promote Religion, Morality, and Universal Benevolence* いわゆる『イソップの寓話』がドイツのゴットホルト・エフライム・レッシング（1729-1781）の目にとまり、1757年3月ドイツ語に翻訳され、1759年出版された。翻訳化を経てレッシングは、リチャードソンの教訓（Lehre）と考察（Betrachtung）の形式を学び、自身の『寓話』90話余りを3巻本にして同じ1759年、ベルリンのフォス出版社から発表している。レッシング独自の寓話では、リチャードソンにあったような考察部分を取り去り、教訓もあえて圧縮し、レッシングの友人の作家クリスチャン・フェリクス・ヴァイセに比較しても表現が簡潔で明晰である。

本稿では、リチャードソン作『イソップ寓話』をレッシングの翻訳により読み解き、代表的な擬人化表現の意味について考えてみたい。レッシングの寓話理論にも触れて、レッシング作『寓話』における擬人化表現の特性についても、狼、犬、鹿、ロバ、ライオン、ヘビ等を例にリチャードソンの場合と比較し、そこから引き出される教訓と世界観の違いを比較検討してみる。

英国のリチャードソンにあっては、さまざまな職業につく市民の描写が豊富で、その合間に動物寓話や自然・事物を描く寓話が見られる。各寓話は簡潔で、教訓（Moral）が短く続き、考察（Reflection）にむしろ主眼があるかのように、リチャードソンの私見、処世訓が綴られている。これは原典の『イソップ寓話』に比べ、18世紀中葉の英国市民に向けて世才を説くことに重きがおかれているためと考えられる。レッシングの寓話では、リチャードソンのような考察部分を取り払い、表現が簡潔で明晰である。同時代の模倣に甘んじる詩人や文芸思潮を批判するために、動物の擬人化が好んで使われている。

## 1. 啓蒙の寓話、動物寓話の隆盛について

啓蒙時代、寓話がいかに隆盛を極めたかについて見てみよう。レッシングが最初に寓話を書いたのは、1747年、ライプツィヒの学生時代においてであった。それは、当時もてはやされていたフランスの寓話作家ラ・フォンテーヌのスタイルで書いた短い話である。続いて、1753年、2、3の散文の寓話を自身の著作集に収めている。当時ライプツィヒでは、寓話作家クリスチャン・フルヒテゴット・ゲラートが女性や子供達の間で人気を得ており、1740年代に『寓話と物語集』(1746/48)を著し、クリスチャン・フェリクス・ヴァイセも子ども向けに初の児童文学の週刊紙 *Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt*、『子どもの友』(1776-1782)を出して、寓話が一大ブームとなっていた。ハンブルクでは、一足先にフリードリヒ・フォン・ハーゲドルンが『詩的な寓話と散文作品の試み』(1738)を著している。ブレナーによれば、1750年頃には50人を超える作家が寓話を発表していたという。<sup>1</sup> 寓話が人気ジャンルであったことから、英語にも堪能だった若いレッシングは、1740年に出版された英国のサミュエル・リチャードソンの『イソップの寓話、教訓的な道徳と考察付』という本来もっと長い副題がある寓話を、ドイツの読者のために『イソップ寓話選集における若者向け道徳哲学』という題名をつけて翻訳したのである。

ニスベトは、この頃のレッシングの英語知識は飛び抜けていると賞揚し、「レッシングは自由な慣用表現を好んだことで、機械的な逐語訳を避けていたものの、意味に忠実であり、どちらから見てもはっきりしている。必要ならば、ドイツ語を母語とする作家が書くように原点を補完して、輝くように翻訳し、原点の精神が完璧に浸透するようにした」<sup>2</sup>と評価している。サミュエル・リチャードソンの原作は、英国本土ではあまり顧みられることなく終わってしまい、むしろ書簡体の小説の方に人々の関心が集まっていた。1757年のレッシングの翻訳は、ドイツでは商業的にも成功をし、この翻訳をきっかけにして、改めてオリジナルの寓話の創作に関心が移ることとなったのである。<sup>3</sup> レッシングの翻訳は原典よりも成功していたと言える。<sup>4</sup> こうして1750年代のレッシングは古代ギリシャやローマの文学を研究し、ギリシャの寓話作家について知識を深めた。ギリシャの寓話原典を学び、ヨーロッパの寓話もたどって研究したことが本格的な創作の基になったのである。

## 2. サミュエル・リチャードソンと『イソップ寓話』

ここで、サミュエル・リチャードソンとはどのような人物であったのか見てみよう。イングランド中部の州ダービーシャー (Derbyshire) の建具商の息子として生まれた彼は、17歳の時にロンドンに出て印刷屋の元に弟子入りをした。彼は印刷屋の骨折り仕事に数年間従事してから印

刷屋の親方になった。文具会社の親方にも選ばれ、1760年には王室の印刷の特権状も取得したのである。<sup>5</sup> 印刷物を刷る仕事柄、文字には慣れ親しんでいたこともあるが、文才があったことから、無学の人のために「書簡文範」を著した。<sup>6</sup> リチャードソンにおいては、道徳性を強調することが文学の使命でもあった。召使の奉公をしている薄幸の娘が、あるじに再三言い寄られ、結局結婚することになる、という書簡体の小説 *Pamela* (1740) で彼の人気に火がついた。中産階級の使用人の娘が、上流階級に駆け上がるのも当時の成功物語である。この年にリチャードソンの『寓話』が発表されたものの、こちらはあまり大きな反響がなかったようである。他に、不幸な娘がロンドンで男に誑かされて悲惨な最期をとげる小説 *Clarissa* (1748) も書簡体小説である。*Sir Charles Grandison* (1753) 『チャールズ・グランディソン卿』(1753) も書簡体小説で、作者が理想とする高潔なキリスト教の紳士を描いた。近代小説の先駆けをなした彼は、「イギリス小説の父」とされている。このように若い薄幸の女性を主人公とするセンチメンタルな小説が、ドイツ語圏のレッシングの市民悲劇『ミス・サラ・サンプソン』やゲラートの『スウェーデンのG伯爵夫人の生涯』等の作品に多大な影響を与えたことは特筆すべきことである。

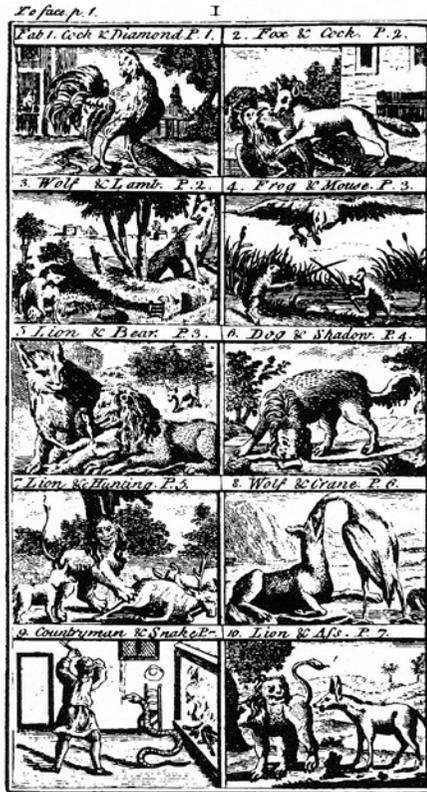
英国中産階級の読者に向けて書かれたリチャードソンの『イソップ寓話』が、本国においてよりも、同時代のドイツの作家に注目されており、寓話の分野でも影響を与えていたことは非常に興味深い。

リチャードソンの『イソップ寓話』は、冒頭でギリシャのイソップの生涯について概観するところから始まり、挿絵付で、寓話の作者について解説がある。しかしながら、レッシングによるドイツ語翻訳では、イソップの伝記部分が割愛されており、リチャードソンの寓話240作品だけが翻訳されている。リチャードソンの個々の寓話部分は短いですが、教訓 (Lehre) を提示した後は考察 (Betrachtung) が続き、作者の寓話解釈の方がむしろ長くなっていることに特徴がある。そこには中産階級出身の作者の価値観が加わり、解釈が必ずしも普遍的な内容とはいえない。考察部分ではむしろ、50歳の作者の人生訓が表明されているかのようである。

### 3. レッシングによる翻訳本 —リチャードソンの寓話における動物

さて、レッシングによるドイツ語翻訳本では、挿絵が原画の銅版画と比べると、ちょうど裏返しになった形で掲載されている。入手した英国の原書を裏側から透かすようにして模写したものと思われる。挿絵の内容はリチャードソンの原書とほとんど同じものである。描かれているのは、18世紀ヨーロッパの牧歌的風景、森、畑、庭、農村、漁村、鍛冶屋、市民の家、貴族の家、川、池、山、海、空など実に多岐にわたり、240枚の挿絵付となっているので視覚的な理解の助けとなっている。

挿絵1 リチャードソン作『イソップ寓話』<sup>7</sup>



挿絵2 レッシングによる翻訳本『イソップ寓話』<sup>8</sup>



最初は、イソップ寓話の有名な話が見られるが、しだいにリチャードソンの世界観を反映する自然界や人間界の話となり、最後の方は、動物よりも人間の描写が多くなっている。イソップ寓話に準じた話もあるが、作者の見解が付け足してある。人間も多数登場し、18世紀の人々の暮らしぶりが読み取れる。動物同志の争い、動物と人間の共存と争い、ギリシャの神、死神も登場し、場面は実に多彩である。

リチャードソンにおける動物描写について特徴的であるのは、動物は多くの場合、人間によって支配されていることである。動物が人間と敵対する姿もしばしば見られる。人生を謳歌している人間の傍らに、鎌を持つ死神が現れる場面も見られる。ギリシャ神、ゼウスやジュピターにすぎるのは、動物も人間も同じである。リチャードソンでは動物による擬人化をしながら、中産階級の価値観から世才が説かれるのが定番のパターンになっている。階級による価値観の制約があることが、英国人全般の普遍的な支持を得られなかった要因の一つなのではないか。

ギリシャのイソップで『アリとセミ』の話があるが、夏の暑い盛りにアリは冬に備えて食べ物

挿絵3 レッシングによる翻訳本『イソップ寓話』<sup>9</sup>



を蓄えてきた一方で、セミは冬になると餌に窮するようになり、アリを訪ねて恵んでもらおうとするが、断られる。リチャードソンではこの話は『アリとコオロギ』に置き換わっている。冬、アリが蓄えを干しているところへコオロギが訪ねてくる。アリはコオロギに、夏歌っていたように冬もずっと歌っているがよい、と皮肉を言う。餌を分け与えたとは書かれていない。日本の最初のイソップ物語である天草版 *Isopo no Favulas* では、『アリとセミ』として記述があり、飢えたセミにアリは優しく食べ物を分け与えている。江戸時代になるとキリシタン文学の『伊曾保物語』では、『アリとキリギリス』の記述に変わっている。

#### 4. レッシングの寓話理論と寓話

レッシングは寓話に関する論文の中で、「寓話とは教えに富んだ不可思議なもの (das Wunderbare) である」というスイスの文芸理論家ブライティンガーの言葉を引用している。<sup>10</sup>

レッシングは古代イソップやヨーロッパの寓話の研究から出発して、自らの寓話をもっと魅力的で簡潔に表そうと意欲を見せていた。1759年に発表されたレッシングの寓話は、第3部作で、最初の第1部と3部は主にレッシングが創作した30ずつの話から構成されているが、第2部は、ギリシャ時代のイソップや他の作家の話が主となっている。エルムによれば、ヴォルフ哲学の影響を受けた1730年のゴットシェートの理論書でも、1759年のレッシングの寓話作品でも、寓話は道徳の普遍的規範の「真実」を証明するもの<sup>11</sup>として通っていた。コープマンは、レッシングによるリチャードソン寓話の翻訳について、「過少評価はできない。レッシングはそれによって市民階級が解放される過程において直接欠かせないものを利用できるようにした」<sup>12</sup>と述べている。クリスチャン・フェリクス・ヴァイセは、レッシングが創作した寓話を読んで、レッシングはまた簡潔な寓話にしたものだと批評をしている。「これでしばらくの間ドイツでは散文の寓話を読むことになるだろう。クロップシュトックは『メシアス』をヘクサーメターで詠った。陽気なグライムはアナクレオン風の歌を作った。だからドイツ中がアナクレオン風になるだろう。レッシングは人々が楽しんで読む寓話を書いてくれた。動物に模倣させた感情が寓話になって、それを聴いていると人はまどろむのだ。」<sup>13</sup>

レッシングの寓話は単に道徳性を物語るだけでなく、英国やフランス文学の模倣に終始するドイツの作家に対する辛辣な批判ともなっている。意識してレッシングはごく初期のラ・フォンテーヌ風の寓話スタイルを離れて、彼独自の散文体をものにしている。<sup>14</sup>各巻の冒頭には寓話の前提となる奥深い森の描写 (I,1) や青銅の像 (II,1) であったり、弓を手にした人間が登場し、各巻の終りにもイソップやミネルヴァ、あるいは羊飼いとナイチンゲールが出てきて締めくくりをしており、動物寓話に一定の枠構造を与えている。

レッシングにおいても、自らの姿にコンプレックスを持ったり、他の動物に生まれ変わりたいと嘆く生き物の描写がある。例えば、新雪が積もった日に、ガチョウが自分も白鳥になったような錯覚をして、首を伸ばしたり、おごそかに曲げてみせたりする話がある。(I,14)<sup>15</sup>しかしながらガチョウが白鳥の真似をしたとて笑い物になるだけである。レッシングの寓話では詩風、文芸思潮が問題なのであり、模倣や外国文学かぶれこそが攻撃の対象となっている。

## 5. リチャードソンとレッシングの寓話における擬人化の比較

リチャードソンとレッシングにおける動物による擬人化について、いくつかの例をあげて比較してみよう。両者ともに狼の擬人化がよく使われる。リチャードソンではイソップと同様、狼と羊の話がある。小川の源流で水を飲んでた狼は、下流で水を飲んでた羊を見つけると、水が濁ったと因縁をつけて羊に襲いかかる。(3)<sup>16</sup>また、狼と鶴の話では、骨がのどにささった狼は、自分の喉の中に鶴の首をつっこんでもらい、とげをとってもらう。鶴は約束されたお礼を尋ねる

と、首がちゃんとついたまま狼の口から無事逃れることができたのだから、それ以上の報酬はない、と狼にすごまれてしまう。(8)<sup>17</sup> また、犬と一緒に育てられた狼と羊飼いの話では、成長した狼は主人と森へ猟に行くが、獲物を森の仲間の狼に分けてしまう。獲物がなくなっていることに気付いた羊飼いは、狼の仕業に気付くと殴って殺してしまう。(122)<sup>18</sup> 番犬と狼の話では、狼は番犬に近づいてズタズタにしてやろうともくろむものの、「骨と皮になって痩せた犬を襲うよりも、2、3日後にある結婚式の後ならば、ご馳走に与かってもっと太っているから、私を襲うのはそれからにしてほしい」との番犬の機知ある訴えにだまされて狼は合点して取り逃がしてしまう。犬は危険を回避しようと賢くなり、窮地を脱するという話である。リチャードソンでは、狼とは虫がよくて、浅知恵のある人間を象徴しており、因縁をつけたり、早合点をする傾向も見受けられる。現実的な当事者としてこのように狼が使われていることが多くなっている。

レッシングでは狼が羊飼いの隙をついて羊を狙うという定番の描写があるが（I,8）、好戦的な狼もあれば（I,12）、臨終の床でざんげをする狼の話もある。（II,4）狼は自分は罪人だが、群れから迷った子羊をあえて見逃して、良いこともしたと回想する。狼は情け深い鶴から喉にささったトゲをとってもらったことも思い出し、最後をキツネにみとってもらう。老いて体力も衰えた狼が、羊飼いと虫のいい分け前の交渉をしようとする話もある（III,16-22）。一人目の羊飼いは交渉に失敗。二人目の羊飼いは一年に六匹の羊を要求し、三人目の羊飼いは一年に一匹の羊を要求するというように、条件を次第に下げていく。四人目の羊飼いはモラルを説かれ、五人目には死んだ羊を要求、六人目にはただ空腹を満たさせてほしいと訴えるものの、追い払われてしまう。いよいよ狼は羊飼いの家へ侵入し、人間の子どもに襲いかかろうとするが、結局は人の手で殴り殺されてしまう。レッシングの狼の話は残酷な結末であるが、羊飼いの中の利口者が、狼に改悛の機会を与えなかったことを後悔する内容になっている。

犬は人間の近くにいる動物で、寓話では忠誠心を象徴するために使われ、狼と一緒に登場することが多くなっている。リチャードソンでは、飢えた狼が、丸丸と太った番犬と知り合い、どうしたらそのように太ることができるか尋ねる。しかしながら、犬の首輪が深く食い込んでいて、輪の回りの毛が抜け落ちている様を見つけると、興ざめをして自らの立場を悟る。(58)<sup>19</sup> イソップ定番の話となっている犬と影の話では、肉を加えた犬が橋を通りかかった際、川に映った自らの影を見て、肉の大きさを羨ましく思い、吠えたところ、肉を落としてしまう。(6)<sup>20</sup> 犬と泥棒の話では、泥棒の気配に気づいて吠えた犬の忠誠心が描写されている。

鹿は臆病の象徴で、リチャードソンの鹿とライオンの話では、狩に追われてライオンのねぐらへ逃れた鹿が、助かったと思いきやこの動物の餌食になる。(117)<sup>21</sup> レッシングの寓話においても、鹿は温和な動物として（III,26）、あるいは気が弱くてヒポコンドリーに罹っている描写が見られる。（III,28）

ヘビの描写において、リチャードソンとレッシングに大きな違いが認められる。リチャードソ

ンの百姓とヘビの話では、情け深い百姓の男が寒い冬、生垣の下で凍っているヘビを見つけ、それを手に取って自分の懐に入れて保護をする。温かくなった時、ヘビは救い主にかみついて災いを引き起こす。(9) この話には次のような教えが込められている。

„LEHRE: Wer einen Undankbaren in seinem Busen aufnimmt, der darf sich nicht wundern, wenn er von ihm verraten wird; auch ist es nicht Barmherzigkeit, sondern Torheit, wenn man allgemeinen Feinden des menschlichen Geschlechts sich zu verbinden sucht.“<sup>22</sup>

「懐の中で恩知らずを受けると、裏切られたとしても不思議はない。例えば人間にとって一般に敵とされるものと結び付こうとするならば、それは慈悲ではなく、愚かというものだ。」

同様に農夫とヘビの話では、敷居のところで一匹のヘビがその家の子どもにかみつき、子どもは傷がもとで死んでしまう。父親はヘビに斧を振りおろすが、的が外れてしまう。しばらくして、人間は仲直りしようと申し出るが、ヘビはもはや信用しない。(30)<sup>23</sup> リチャードソンの教訓は、「敵同士、仲良くしようとしても無理だ」というものである。また、少年とヘビの話では、ウナギをつかまえようとした少年が誤ってヘビをつかむ。これは、よく似たものを間違えてはならないという教訓である。(103)

„Eine Schlange für einen Aal halten ist eben der Irrtum, den wir begehen, wenn wir das Laster für Tugend ansehen. Der Knabe tat es unversehens; und auch wir tun es oft so.“<sup>24</sup>

「ヘビをウナギと間違えてつかむような過ちは、悪徳を良徳とみなしてしまう時におかすものである。少年はそれを不意にしてしまった。私たちもそんなことをよくやってしまう。」

さらに、抵抗するヘビは必死である。カラスとヘビの話では、日向ぼっこをしていたヘビが、突然、カラスにくわえられて宙に舞いながら必死にたわんで向きを変え、カラスにかみつく。カラスは毒が回って命を落としてしまう。リチャードソンの教訓は、「うまくいったと思っても、ひどい仕打ちを受けることがある」というものである。リチャードソンでは自然や動物を制するのは人間である。

一方、レッスンでは、少年とヘビとの対話の一つあるのみであるが、ヘビはリチャードソンのように、人間から残忍な扱いを受けない。レッスンでは、人間に飼いならされたヘビが登場し、その家の少年と対話をする。少年曰く、

„Kaum fühlte sich die Böse wieder, als sie ihren Wohltäter biß; und der gute freundliche Mann mußte sterben.“<sup>25</sup>

「その性悪なヘビは正気に戻るやいなや、その恩人にかみついた。するとその親切な男は命を落としてしまったんだ。」

藪の下にいたヘビを温めてやったら、親切な人間はかまれて死んだというのである。しかしヘビは、リチャードソンの話について

„Wie partiisch eure Geschichtsschreiber sein müssen! Die unsrigen erzehlen diese Historie ganz anders. Dein freundlicher Mann glaubte, die Schlange sei wirklich erfroren, und weil es eine von den buten Schlangen war, so steckte er sie zu sich, ihr zu Hause die schöne Haut abzustreifen. War das recht?“<sup>26</sup>

「あなた達の歴史記述家は何と偏っていること！我々の歴史記述家はこの物語を全く違ったように語っている。あなたの言う親切な男は、ヘビは本当に凍りついていると思ったんです。それに色のきれいなヘビのうちの一匹だったので、家でその皮を剥ぐために男はヘビを懐に入れたんです。これが本当ではありませんか。」

「そのヘビはきれいな色の皮をはがされそうになったからかみついた」とレッシングのヘビは弁護して、物語の書き手は違った風には書いていと主張するのである。（Ⅱ,3）このようにレッシングでは賢いヘビと親切な少年の話になっている。さらに少年の父親がこの対話を聞いて、「恩義を忘れたからそのような不幸が起こる。本当の恩義ならば、そのような報いは受けないはずだ」と論ずるのである。

„Wahre Wohltäter haben selten Undankbare verpflichtet; ja, ich will zur Ehre der Menschheit hoffen – niemals.“<sup>27</sup>

「本当の慈善家は、自らの行ないに恩知らずなまねをされたことはめったにない。そうとも人間の名誉のために — 決してそんなことはないと願いたいよ。」

ちなみに類似した話は、日本の『伊曾保物語』にも恩義を忘れた大蛇の話として伝わっている。このようにヘビを例にして見ても、必ずしも人が忌み嫌う生き物としては描写されてはいない。この寓話も、後の神学論争でレッシングが示したような、少数派のキリスト教徒を弁護したり、啓蒙思想によってユダヤ人への偏見を解こうとした姿勢へと繋がっているとと言えるのではないか。

レッシングの寓話でも動物の順位争いが話題となる。（Ⅲ,7-10）集まった動物の間で決着がつかなかった時、彼らは人間を裁判官に迎えて順位をつけてもらおうとするが、人間にとって動物

がどれくらい役に立っているかが順位の基準となるならば、ライオンをはじめ多くの動物は結局反対に回り、人間に順位を決めてもらうのも愚かだと悟って、この争いも終りにする。レッシングにおける動物は賢く、必ずしも人間に支配されているばかりではないのである。

## 6. 結 語

英国のリチャードソンにあっては、さまざまな職業につく市民の描写が豊富で、その合間に動物寓話や自然・事物の描写が混在する。各寓話は簡潔で、教訓が短く続き、考察部分にむしろ主眼があるかのように、リチャードソンの私見、処世訓が綴られている。これは原典の『イソップ寓話』に比べて、18世紀中葉の英国中産階級に向けて世才を説くことに重きが置かれていたと考えられる。

レッシングの場合、寓話と教えが一体になり、簡潔で明晰である。レッシングではリチャードソンの翻訳から学びつつも、人間の登場は数少なく、ドイツの田園や森で見かける身近な動物、植物の他に、ギリシャの神々が登場する。自然は人間ではなく、神の手にある。レッシングにおいては、市民の処世術を説くことよりも、同時代の模倣に甘んじる詩人や文芸思潮を批判するために、動物の擬人化が使われている。彼の『寓話』の素材と形式は、むしろイソップの原典に近く、機知と諷刺と陽気さがその基調となっている。

## 註

- 1 Nisbet, Hugh Barr: *Lessing. Eine Biographie*. München: C.H.Beck 2008, S.350.
- 2 Nisbet: *Ebenda*. S.301.
- 3 Nisbet: *Ebenda*. S.350.
- 4 Richardson, Samuel: *Äsopische Fabeln mit moralischen Lehren und Betrachtungen. Aus dem Englischen übertragen und mit einer Vorrede von Gotthold Ephraim Lessing*. Walter Pape (Hg.) Berlin: Henssel 1987. Nachwort.S.379. パーペはこの著書の中でレッシングとサミュエル・リチャードソンの共通点として、文学理論家、通俗哲学者、ジャーナリストであるという3点を指摘している。
- 5 Sir Scott, Walter: *The Lives of the Novelists*. Everyman's Library no.331. London: J.M. Dent & Sons, Ltd. [n.d.] S.4.
- 6 Vgl. Theodor Brüggemann u. Hans-Heino Ewers (Hg.): *Handbuch zur Kinder- und Jugendliteratur. Von 1750 bis 1800*. Stuttgart: Metzler 1982, S.1239.
- 7 Richardson, Samuel: *Aesop's Fables, with instructive Morals and Reflections, Abstacked*

- from all Party Considerations, Adapted To All Capacities, and design'd to promote Religion, Morality and Universal Benevolence. The Life of Aesop prefixed. (Reprint) New York & London, Garland 1975. To face. P.1. I.*
- 8 Richardson, Samuel: *Äsopische Fabeln mit moralischen Lehren und Betrachtungen. Aus dem Englischen übertragen und mit einer Vorrede von Gotthold Ephraim Lessing.* Ebenda. S.17.
- 9 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.27.
- 10 Lessing, Gotthold Ephraim: *Fabeln. Abhandlungen zur Fabel. II. Von dem Gebrauche der Tiere in der Fabel.* In: Gotthold Ephraim Lessing Werke und Briefe. Gunter E. Grimm (Hg.) Bd. 4. S.378.
- 11 Elm, Theo: *Diskurse der Macht. Naturrecht und Fabelkasus.* In: Fabel und Parabel. Kulturgeschichtliche Prozesse im 18. Jahrhundert. Theo Elm u. Peter Hasubek (Hg.) München: Wilhelm Fink 1994, S.149.
- 12 Koopmann, Helmut: *Lessing: Das Allgemeine im Besonderen. Aufklärung als Denkfigur und Fabeltheorie.* In: Fabel und Parabel. Kulturgeschichtliche Prozesse im 18. Jahrhundert. München: Wilhelm Fink 1994, S.63.
- 13 Weisse, Christian Felix: *Bibliothek der schönen Wissenschaften.* Bd. 7, St. 1, 1761, S.138-142.
- 14 Nisbet: Ebenda. S.350.
- 15 Lessing: Ebenda. S.308.
- 16 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.11-12.
- 17 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.19
- 18 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.180-182.
- 19 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.92-93.
- 20 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.15.
- 21 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.174-175.
- 22 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.20.
- 23 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.51.
- 24 Richardson: *Äsopische Fabeln.* Ebenda. S.155-156.
- 25 Lessing, Gotthold Ephraim: *Fabeln.* Ebenda. S.316.
- 26 Lessing: Ebenda. S.316.
- 27 Lessing: Ebenda. S.316.

## 参考文献

### 一次文献

- Gottsched, Johann Christoph: *Versuch einer Critischen Dichtkunst: Erster allgemeiner Theil*. In: „Johann Christoph Gottsched Ausgewählte Werke.“ Joachim Birke und Brigitte Birke (Hg.) Bd. VI/1. Berlin u. New York: Walter de Gruyter 1973.
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Fabeln. Abhandlungen zur Fabel. II. Von dem Gebrauche der Tiere in der Fabel*. In: „Gotthold Ephraim Lessing Werke und Briefe.“ Gunter E. Grimm (Hg.) Bd. 4. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1997.
- Richardson, Samuel: *Aesop's Fables, with instructive Morals and Reflections, Abstracted from all Party Considerations, Adapted To All Capacities, and design'd to promote Religion, Morality and Universal Benevolence*. The Life of Aesop prefixed. (Reprint) New York & London, Garland 1975
- Richardson, Samuel: *Äsopische Fabeln mit moralischen Lehren und Betrachtungen. Aus dem Englischen übertragen und mit einer Vorrede von Gotthold Ephraim Lessing*. Walter Pape (Hg.) Berlin: Henssel 1987.
- Anne-Kristin Mai (Hg.): *Christian Felix Weiße 1726-1804. Leipziger Literat zwischen Amtshaus, Bühne und Stötteritzer Idyll*. Beucha: Sax-Verlag 2003.

### 二次文献

- Elm, Theo: *Diskurse der Macht. Naturrecht und Fabelkasus*. In: „Fabel und Parabel. Kulturgeschichtliche Prozesse im 18. Jahrhundert.“ Hrsg. v. Theo Elm u. Peter Hasubek. München: Wilhelm Fink 1994.
- Fick, Monika: *Lessing-Handbuch: Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart u. Weimar: Metzler 2000.
- La Fontaine, Jean de: *Fabeln*. (Übertragen von Theodor Etzel) München : Wilhelm Goldmann o.J.
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Fabeln*. (ein roher Bogen) Braunschweig: Waisenhaus-Buchdruckerei 1978.
- Nisbet, Hugh Ban: *Lessing. Eine Biographie*. Aus dem Englischen übersetzt von Karl S. Guthke. München: Verlag C.H. Beck 2008.
- Sir Scott, Walter: *The Lives of the Novelists*. (Everyman's Library no.331.) London: J.M. Dent & Sons, Ltd. [n.d.]
- Sternberger, Dolf: *Über eine Fabel von Lessing*. In: „Gotthold Ephraim Lessing“ Hrsg. v.

- Gerhard u. Sibylle Bauer. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. (Wege der Forschung Band CCXI) 1968, S.245-259.
- Theodor Brüggemann u. Hans-Heino Ewers (Hg.): *Handbuch zur Kinder- und Jugendliteratur. Von 1750 bis 1800*. Stuttgart: Metzler 1982.
- Reinhard Dithmar (Hg.): *Die Fabel. Geschichte · Struktur · Didaktik*. (UTB73) (7. Auflage) Paderborn: Schöningh 1988.
- \_\_\_\_\_ (Hg.), *Fabeln, Parabeln und Gleichnisse*. (UTB 1892) Paderborn: Schöningh 1995.
- Georg Schuppener (Hg.): *Germanistische Streifzüge durch Leipzig*. Leipzig: Hamouda 2009.
- Dietrich Steinbach(Hg.): *Fabel und Parabel mit Materialien*. Stuttgart: Ernst Klett Verlag 1982.
- 小林英起子：啓蒙の動物寓話における擬人化（1） — レッシングとヴァイセによる描写比較 『広島大学大学院文学研究科論集』第70巻（2010）S.39-51.

## Personifikation in den Fabeln der Aufklärung (2)

— Eine vergleichende Betrachtung zwischen Lessing und Samuel Richardson

Ekiko KOBAYASHI

Die Fabel ist eine der bevorzugten Gattungen der deutschen Aufklärung. Samuel Richardson veröffentlichte 1740 *Aesops Fables*, in denen es nach jeder kurzen Geschichte eine Lehre und eine längere Betrachtung gibt. Diese Publikation richtete sich an das englische Publikum in der Mitte des 18. Jahrhunderts. Lessing beschäftigte sich mit der Übersetzung dieses Werkes, veröffentlichte es 1757 und schrieb 1759 seine eigenen 90 Fabeln in drei Bänden. Hier werden zuerst die charakteristischen Züge der Personifikation bei Richardson im Spiegel der Lessings Übersetzung betrachtet und dann mit denen bei Lessing verglichen. Dann möchte ich den Unterschied in Lehre und Weltanschauung zwischen den beiden Autoren betrachten.

In Richardsons Fabeln wird das Bürgertum in unterschiedlichen Berufen vorgestellt; dazwischen gibt es Fabeln von Tieren, der Natur im Allgemeinen und unbelebten Dingen. Die Fabeln selbst sind kurz und schließen sich kurze moralische Lehre und längere Betrachtungen an, in denen der Verfasser seine eigenen Lebensklugheit darstellt. Charakteristisch bei Richardson ist, dass die Tiere meist von Menschen beherrscht sind. Die Menschen sind den Tieren gegenüber manchmal auch feindlich gesinnt. Da aber seine Moral immer von der Weltanschauung begrenzt ist, konnte ihm wohl nicht der Beifall von Lesern aus allen sozialen Klassen zuteil werden.

Bei Lessing werden diese Betrachtungen abgekürzt. Seine Fabeln sind kurz und klar, Tiergeschichten und Belehrung verschmelzen. Insgesamt wird weniger über Menschen berichtet. Stattdessen treten Tiere und Pflanzen in der Idylle oder im Wald sowie die griechischen Götter auf. In Lessings Fabelwelt wird die Schlange z.B. von Menschen nicht schlecht behandelt. Wie bei Äsop streiten sich die Tiere um ihren Rang, aber sie bemerken schließlich, dass der Rangstreit völlig bedeutungslos ist. Die Tiere zeigen manchmal mit solchen vernünftigen Entscheidungen, dass sie von den Menschen unabhängig sind. Die Personifikation bei ihm stellt schließlich eine scharfe Kritik an den zeitgenössischen, hauptsächlich nachahmenden Dichtern dar. Es geht bei ihm um Kritik und die eigenständige schöpferische Literatur. Seine Stoffe und die Form sind dem Äsop näher und im Grundton stets durch Witze und scharfe Kritik gekennzeichnet.